英語苦手改善･英語力向上への試み--「英語学習調査結果」からの考察--

水野　知津子*

Considering how to improve students' English ability and negative attitude toward English learning --With survey results--

Chizuko MIZUNO.

ABSTRACT

More than half of senior high school students (3rd graders) have negative attitude toward English learning according to various survey results mainly conducted by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. The main purpose of this study is to examine these survey results in order to improve Kosen students' English ability and negative attitude toward English learning. The survey results suggest some useful information although teaching environment is partly different.

KEY WORDS: survey result, motivation, collaborative learning, teaching approaches

１．はじめに

グローバル化された世界で、誰とでも対等にコミュニケーションできる実践的英語力を持つ事は不可欠になっており、より効果的な英語教育が求められている。一般に工学系学生は英語に苦手意識を持つ学生が多いとされる（西澤・吉岡・伊藤、2010）が、文部科学省実施の「英語力調査（高校 3 年生）」結果によると、文系を含む高校 3 年生全般でも英語に苦手意識を持つ学生は過半数を越えている。

高校は高専より英語授業単位が多く、外国語指導助手（ALT）もおり、指導環境には恵まれていると考えられる。文科省実施の「英語力調査」結果を中心に参照しながら主に高校との比較を通して、実施状況、問題点を考察し、英語苦手改善と英語力向上に有効な指導法を探り、高専での指導に取り入れたい。

２．英語学習調査

２.１　文部科学省実施「英語力調査」

文部科学省の「英語力調査結果」は 2014 年度に国が英語教育改善のために全国無作為抽出ではじめて行った大規模英語力調査である。全国の高等学校（国公立校約 480 校）の 3 年生約 7 万人を対象に、英語 4 技能の英語力、学習状況を調査している。中学 3 年生を対象にした英語力調査も実施されている。

2017 年度では、「英語力調査（高校 3 年生）」、「英語力調査（中学校 3 年生）」ともに①生徒の意識調査、②教員の意識調査、③実施した英語力測定試験の結果が示されている。この英語力測定試験は世界標準となっている CEFR （Common European Framework of Reference for Languages:ヨーロッパ言語共通参照枠）の A1 を中心にレベルを測定できるように設計したものである〈別紙参照〉。

①では、生徒の英語学習への態度、身につけたい英語力、英語授業で実施した言語活動、中学校で学んだことで高校の授業で役立ったことが調査され、②では、教員がどのような指導を行ったかが調査されている。

*一般科目

2014 年度の「英語力調査（高校 3 年生）」では、「学校の取り組み紹介」として以下の学校での具体的な取り組みが紹介されている。1) スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクールの指定を受けた英語力・意欲共に高い高校での取り組み。思考力・表現力を伸ばす指導でコミュニケーション・ツールとしての英語力を鍛えている。2) 独自教材と共通の評価方法を用いて 4 技能を総合的に伸ばしている学校紹介。3) CAN-DO リスト [外国語教育における学習到達目標設定のための手引き（投野、2017）] に基づいた 4 技能統合型の授業を推進している高校での取り組み、である。

２･２ ベネッセによる「実態調査」

ベネッセ教育総合研究所が実施した英語学習調査の結果を示す。①中学 1 年生から高校 3 年生（約 6,300 名）を対象に実施した「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」と、②中学高校の教員を対象にした「中高の英語指導に関する実態調査 2015」、③「子供の生活と学びに関する親子調査 2016」である。③は東京大学社会科学研究所との共同研究である。①では英語への態度、得意・苦手、苦手になった時期や英語学習に関するつまずきや意識、②では中高の英語教員の悩みをたずね、③では中学生の教科の好き・嫌いを調査している。

２．３　明石高専での調査

筆者が担当した 2017 年度の２年生と５年生、2018 年度 1 年生のアンケート結果から、英語への態度、1 年生入学直後に尋ねた「目標英語力」に関するアンケート結果を示す。

３．調査結果と考察

３･１ 英語学習に対する態度

３･１･１　文科省実施「英語力調査」

文部科学省実施の調査では、「英語学習が好きである」と回答したのは中学 3 年生が 54.6%、高校 3 年生は 47.2%（対象人数：各約 6 万）であった（図 1）。高校 3 年生になると否定的態度が過半数を上回った。回答は、1)そう思う、2)どちらかといえば、そう思う、3)どちらかといえば、そう思わない、4)そう思わない、の 4 項択一である。1)と 2)、3)と 4)を合わせ、それぞれ「好きである」、「好きでない」とした。中学生、高校生どちらにおいても、試験結果の得点が高い方が「好きである」と回答する割合が高い。

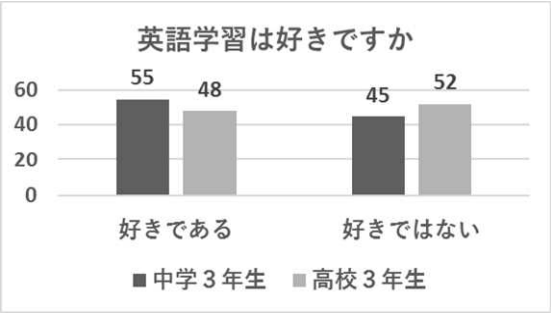

図１文科省調査結果（2017 年度）

スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクールに指定された高校 3 年生６学級の生徒（251 名）を対象にした調査結果 [2014 年度] では、「英語の学習は好きか」という質問に 70%以上が「好き」 [「そう思う」「どちらかといえばそう思う」] と回答している。

３･１･２ ベネッセ調査結果

中高生は学年が上がるにつれて英語好きは減少し、苦手意識が増加している。7 割が文法に苦戦しており、中学生にとって英語は他教科と比較して好きな教科の上位には位置していない（加藤、2017）。

ベネッセ教育総合研究所が 2014 年度実施した調査では、全国の中学生（1 年生 1,057 名、2 年生 1,028 名、3 年生 996 名）と高校生（１年生 931 名、２年生 790 名、３年生 1,433 名）に対して英語学習への意識を尋ねている。質問は「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか」で、回答は 1)とても得意、2)やや得意、3)やや苦手、4)とても苦手、の 4 項択一である。結果は図 2 の通りである。小数点以下は四捨五入し、無回答・不明〈各 0.5、0.4〉は省いた。この調査でも高校生になると苦手が過半数を上回っている。

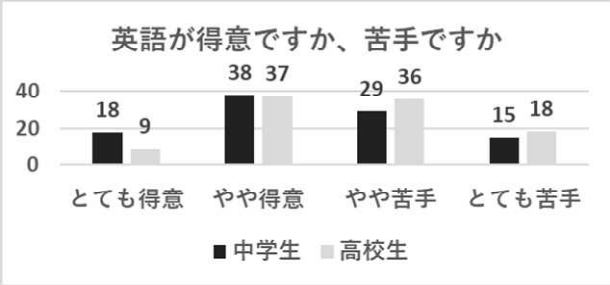

図 2 ベネッセ調査結果（2014 年度）

３･１･３ 明石高専学生

筆者が担当した明石高専学生の英語への否定的態度が図 3 である。「本校の学生は中学校で成績がオール

５」「非常に優秀だ」と多くの教員が話すのを聞いた。その学生の英語への態度である。限られたクラスだけの対象ではあるが、否定的態度が過半数を上回ったのは2年生だけであった。

回答は４項択一で、「英語が好き」 [1)そう思う、2)どちらかといえば、そう思う] は 2017 年度 5 年生が 53%、2 年生は 42%、2018 年度 1 年生は 63%、「英語が好きではない」は 3)どちらかといえば、そう思わない、4)そう思わない、を合わせた数字である。授業開始前４月に実施した。いずれも筆者にとって指導がはじめての学生ばかりである。

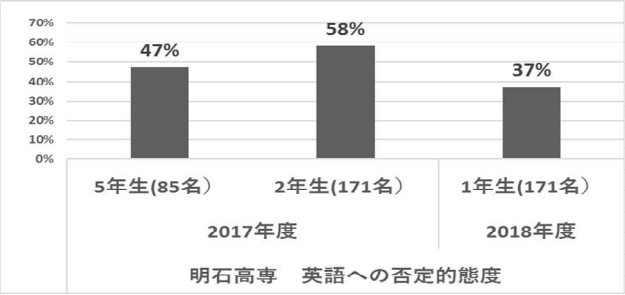

図 3 明石高専学生

３・２ 言語活動と英語力得点

３・２・１　文科省調査全体結果（2017 年度）

文部科学省の「英語力調査（高校 3 年生）」結果（2017 年度）は、A2 レベル以上の割合は目標の 50%に４技能すべてで達していない（図４）。英語力試験に採用された CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）では、得点が高い順に B2→B1→A2→A1 になっている。「読むこと」「聞くこと」は４技能の中では高い数字になっているが、集中しているのは A1 上位から A2 下位レベルである。

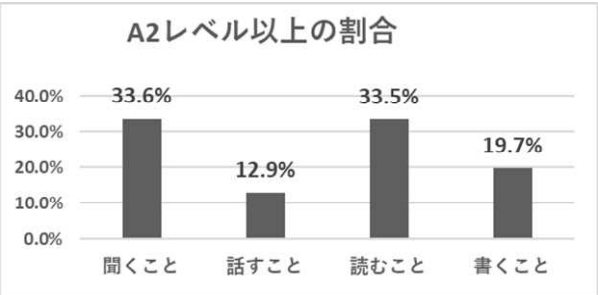

図４文科省調査結果（高校３年生）2017 年度

高校の授業では伝統的な文法訳読式が多いと言われるが、実際はどうなのだろうか。英語力調査結果から、得点は指導法と関係しているのだろうか。４技能のバランスが悪い。「書くこと」「話すこと」が低くなっている。授業で実践されている言語活動によって得点の差が見られると考えられる。文科省実施の調査では、統合的な言語活動を行っている学校の方が４技能すべてにおいて得点が高い。特に「話すこと」「書くこと」については得点の差が大きい。技能統合型「聞いたり読んだことに基づいて、情報や考えなどについて話し合ったり、意見交換する活動」を行っていると回答した教員は 48.9%である。技能統合型「聞いたり読んだりしたことに基づき、情報や考えなどについて、書く活動」を行っている教員は 50.8%であった。

３・２・２ 特別取り組み校での結果１

2014 年度文科省「英語力調査（高校３年生）」に紹介された特別な指導を行っている学校の得点や指導法は全体とは異なっている。1)スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクールの指定を受けた高校（251 名）の試験結果は、４技能全体において得点は全国平均を上回っている（図 5）。Reading は 320 満点で、全国平均 126.7 点に対して 201.6 点、Listening は 320 満点で、全国平均 117.1 点に対して 203.4 点、Writing は 144 満点で、全国平均 24.9 点に対して 81.1 点、Speaking は 14 満点で全国平均 4.2 点に対して 10.9 点になっている。特色のある指導内容としては、①英文を繰り返し聞き、読み、様々なペア活動を実施、②自分の考え・意見をアウトプットする機会が多い、③話しやすい教室の雰囲気作りが上げられている。

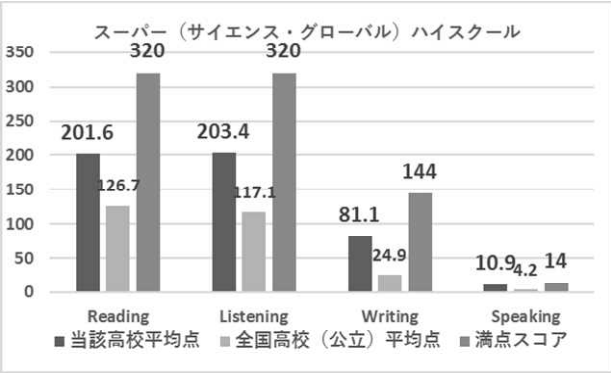

図５文科省調査結果特例①（高校３年生）2014 年度

指導環境としては、常勤の ALT が一人おり、3 年次はライティングの授業で、授業の４回に１回の割合で入る。筆者が勤務経験のある神戸市立の高校の国際科では、常勤の ALT は 6 名いた。40 人のクラスを 2 つに分け、20 名クラスの授業は日本人教員と ALT 二人で指導していた。授業はすべて英語である。現在は 1 クラス 10 名のクラスもあるようである。生徒だけでなく日

本人教員の英語力向上にも有効である。英語指導環境としては理想的だろう。

３･２･３ 特別取り組み校での結果２

2014 年度文科省「英語力調査（高校３年生）」に紹介された特別な指導を行っている取り組み紹介で３番目の「CAN-DO リストに基づいた４技能統合型の授業推進」高校の試験結果（対象 742 名）では、４技能の言語活動の割合が高く、ライティング、スピーキング力が全国平均の２倍以上になっている（図６）。

特色ある取り組みとして①学習到達目標は CAN-DO リストに基づいた授業設計で、教員間や教員・生徒同士で目標を共有、②毎時間ペア活動を行い、実際のコミュニケーションの中で当該文法事項を使うことを大切にする、③まとまりのある文章を書き、完成した文章をペアやグループで相互に読み合う、スピーキングテストと同時にライティングの評価を行う。

ALT は１人で、週４日勤務。授業は１・２学年の全クラスで週１回担当している。ALT の協力があると指導内容も人為的でない本物で説得力があり、教室での英語使用も当然のものとなる。

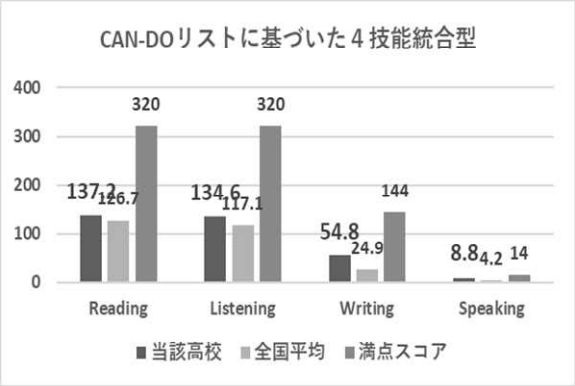

図６文科省調査結果特例②（高校３年生）2014 年度

３･３　ベネッセ英語学習調査結果

３･３･１ 英語指導方法・活動

ベネッセの 2015 年度「中高の英語指導に関する実態調査」には中学校教員（2,518 名）、高校教員（2,569 名）が回答した。中学校での指導方法・活動内容は、音読、発音練習、文法の説明、教科書本文のリスニング、などが９割を超えている。音声を中心とした指導や文法が多い。「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」は 76.8%、「英語での会話（生徒同士）」は 79.9%、「スピーチ・プレゼンテーション」は 57.1%、「即興で自分のことや気持ちや考えを英語で話す」は 42.7%で実施されている。

一方、高校では中学校と同様に音読、発音練習、文法の説明が多い。「自分のことや気持ちや考えを英語で書く」43.0%、「即興で自分のことや気持ちや考えを英語で話す」は 33.7%、「英語で教科書本文の要約を書く」は 28.9%、「スピーチ・プレゼンテーション」は 25.8%である。中学校に比べて「話す」「書く」活動の実施率は低くなっている。

３･３･２ 教員の指導への意識・悩み

中学・高校教員は、指導において重要だと思うこととその実行について大きなギャップを持っている事が明らかになった。「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」は中学教員で 82.3%、高校教員で 66.8%「とても重要だ」と回答したが、「十分実施している」という回答は中学教員は 19.2%、高校教員は 9.9%であった。「４技能のバランスを考慮して指導する」ことをとても重要だと回答したのは中学では、69.2%、高校では 59.4%であったが、「十分実行している」と答えたのは中学 15.3%、高校 9.8%であった。理想と現実の差、教員の悩みが見える。

指導に関する悩みの上位には、「授業準備の時間が十分にとれない」中学 75.3%、高校 70.2%、「生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい」中学 73.8%、高校 67.9%などどの教科にも共通することがあがっているが、「英語教師に求められることが多くて負担である」中学 65.3%、高校 75.2%、「コミュニケーション能力の育成と、入試のための指導を両立させることが難しい」中学 73.7%、高校 74.4%、「効果的な指導方法がみつからない」中学 53.0%、高校 60.3%など、英語教員だからこその悩みも多い。また、「教員間のコミュニケーションが少ない」は中学では 25.1%、高校 34.6%であり、教員ならではの悩みも見られた。学会等主催の研修会に勤務校の英語科教員が揃って自主的に参加している場合を見かけることがある。悩みを共有でき、協力体制が整った環境にあり、教員は元気で、授業での取り組みも成功する可能性が高いようである。

３･３･３　生徒のつまずきの原因

英語に対する苦手意識やつまずきの原因について教員にたずねたところ、中学校では「単語を覚えるのが苦手」60.9%、「学習習慣がついていない」60.2%、高校では「学習習慣がついていない」65.7%、「文法事項が理解できない」61.0% が上位の回答であった。

2014 年度「中高生の英語学習に関する実態調査」で高校生に「英語が苦手になる時期」をたずねたところ、「中１の前半」から「中２の後半」までと「高１の前

半」に大きな２回のピークがあった。英語学習のつまずきに関しては、「文法が難しい」は中学生 68.5%、高校生 79.2%、「英語を話すのが難しい」は中学生 56.3%、高校生 72.9%、「英語の文を書くのが難しい」は中学生 65.7%、高校生 77.5%、「毎週ある英語のテストのための勉強が大変」は中学生 36.4%、高校生 48.2%である。中学生よりも高校生に学習上のつまずきが多く、中学生と高校生では 10 ポイント以上の差がある。新しい文法項目、新出単語が増え、英文も複雑になり、苦手意識やつまずきの原因になっているのがわかる。

３・３・４　英語学習の目的・あこがれ

英語に関する意識調査では、「英語が話せたらかっこいい」が中学生 88.5%、高校生 90.5%と高い数字になっている。これが英語への態度改善のヒントとなりそうである。「外国の人と友達になりたい」中学生 65.6%, 高校生 71.5%、「外国の文化やスポーツに興味がある」中学生 62.8%、高校生 66.2%、と外国への興味も生かせそうである。一方、「英語のテストでいい点を取りたい」は中学生 93.9%、高校生 90.2%、「就職に役立つ」中学 86.1%、88.9%、高校「いい高校や大学に入り易い」中学 84.7%、高校 85.6%と、高い数字になっている。

英語の勉強で大切なこととしては、中高生共に「英語でたくさん会話すること」が一番高い数字（中学生 53.4%、高校生 59.8%）になっている。「単語をたくさん覚える」は中学生 46.5%、高校生 56.4%、「文法の知識を増やす」は中学生 38.2%、高校生 35.6%である。一方で「英語のテストでいい成績をとる」「英文を一文一文日本語に訳す」はそれぞれ中学生 16.5%、10.2%、高校生 10.2%、6.7%で少なくなっている。授業で英語を話す、使うような活動を増やすことが有効と見られる。

３・４　明石高専学生

３・４・１ 目標英語力

2018 年度４月、授業開始前に明石高専１年生に「目標英語力」をたずねてみた（図７）。対象は 171 名で、回答は複数回答にした。項目として①「就職に有利なようでできるだけ高いレベルの英検やTOEICなどで高いスコアを取る」59 名、②「理系に必要な論文を書いたり、世界に発信できるようになる」37 名、③「海外旅行、研修等に必要な英語力」50 名、④「簡単でも英語でコミュニケーションが出来る力」46 名、⑤「英語で世界中の人と意見交換が出来る力」69 名、⑥「その他」2 名である。これに「その理由とコメント」として自由記述してもらった（図７）。ベネッセの調査結果と同じように、④と⑤はコミュニケーション、話すことへの憧れが伝わる。

５つの項目の中では⑤「英語で世界中の人と意見交換が出来る力」が一番多く、次いで①「就職に有利なようでできるだけ高いレベルの英検やTOEICなどで高いスコアを取る」の実利的な目標が多かった。自由記述は全部で 151 名おり、「コミュニケーションできないと活躍できない」「コミュニケーションが大切」「話したい」が多く、合わせると 54 名の記述があった。次いで「仕事に有利」「必要」「世界で活躍したい」が 44 名の記述があった。「留学したい」は 12 名、「海外研修に行きたい」が 3 名であった。「論文が書きたい」と記述したのは 2 名であった。ベネッセの調査結果と同じように、④と⑤はコミュニケーション、話すことへの憧れが伝わる。

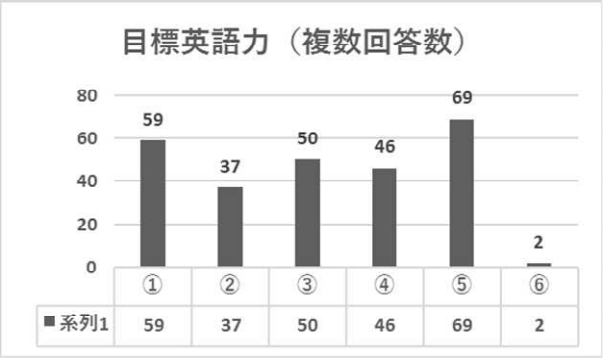

図７明石高専生の英語学習目標

４．調査結果から改善を探る

高専での英語苦手減少、英語力向上に向けて調査結果を見てきた。中高生対象の調査結果から、「英語苦手減少・英語力向上は」工学系学生だけではなく、日本の英語教育にとって大きな課題であることがわかった。英語教育を重視したスーパーハイスクール等の一部の高校を除き、学年が上がるにつれて英語に苦手意識を持つ生徒が増え、高校３年生で過半数以上が否定的態度を持つようになっていた。英語力も低いものが多かった。調査結果や高校との比較を通して高専での改善方法を探りたい。

４・１ 指導環境

文科省は高校での週当たりの具体的な英語授業時間数を報告していないが、高校での時間数は多いようである。学校によって異なるが、6～8 時間が多いようである。学習頻度回数を考えると、同じ 2 単位でも高校の 50 分授業２回のほうが週１回 90 分授業よりも有利であると思われる。ALT の配置もある方が指導内容、英語使用に効果が高い。しかしながら、英語指導環境は予算の点からも改善は簡単ではない。与えられた環

境の中で、効果が出るように工夫をするしかない様に思われる。指導法を考えたい。

2019 年度前期文法授業ではフィリピン学生が各クラス６名ずつ２週間授業に参加した。直前の連絡であったが、フィリピン学生には日本に関する質問、自分の知りたいことを事前に書いてもらい、日本人学生に回答してもらうグループ活動等をしてもらった。学生は必死で英語を使っていたように思う。ALT はいないが、機会があれば英語指導に生かせるようにしたい。

４・２ 指導法

調査結果から有効と思われる指導法としては、１）４技能をバランスよく指導する、２）文法事項理解後は実際のコミュニケーション活動で当該文法事項を使うようにする　３）英文を繰り返し聞き、読み、様々なペア活動を行う、４）自分の考えや意見をアウトプットする活動を行う、５）話しやすい教室の雰囲気を作る、６）まとまりのある文章を書き、完成した文章をペアやグループで相互に読みあい、７）スピーキングテストと同時にライティングの評価を行う、などである。

今までの授業でもこれらの指導法に近いものを取り入れてきたと思う。スピーキングテストは ALT と一緒に指導した場合は比較的簡単に実施できるが、一人で厳格に行うことは難しいと思われる。今まではペア活動でお互いに英語でしゃべる語数を数える等、行ってきたが、限界がある。実施方法などで改善できることがあれば行っていきたい。

４・３ 協働学習

英語学習にはコミュニケーションが大切であり、実際に４技能を使用することが英語力向上に必要である。英語は体育と同じ実技授業だと考えている。40 人以上のクラスで英語を使うにはペアやグループ活動が有効で、調査結果もその有効性を示している。コミュニケーション苦手の学生もいるが、社会で生きていくにも他者と上手にコミュニケーションをとる力が求められている。英語でコミュニケーションを楽しみながら、英語力、コミュニケーション能力両方を修得して欲しい。

４・４ 動機付け

英語学習の目的・憧れとして「英語が話せたらかっこいい」が非常に多かった。英語を日常生活で使用することがほとんどない環境では学校での英語授業が貴重な時間となる。文法知識を身につけながら実際に既習知識を使ってコミュニケーションをとることが大切である。英語を使う楽しさや英語力向上を実感すれば自ら英語を学習する自立的学習者になる可能性が大きい。大きな制約のあるなかで、学生の「やる気・やりたい気持ち」を持てるように工夫したい。

５．まとめ

英語学習調査から多くのことを学ぶことができた。英語苦手改善・英語力向上へ向けて学んだ事を生かしてさらに改善を続けたい。

参考文献

1) ベネッセ教育総合研究所：“中高生の英語学習に関する実態調査 2014”(2014).
2) ベネッセ教育総合研究所：“中高の英語指導に関する実態調査 2015”(2015).
3) 葺合高校ホームページ：www2.kobe-c.ed.jp/fki-hs、（2019）.
4) 加藤由美子：“生徒が「英語を好き」であり続けるために―中高生と中高英語教員への実態調査からみえること―“、『英語教育』、10 月号、22-23 頁(2017).
5) 水野知津子：“高専学生の英語嫌い減少と実践的英語力向上をめざして―アクション・リサーチと共により効果的な指導法を探る―” 明石高専　研究紀要 第 61 号、29-33 頁、(2019).
6) 文部科学省：“英語教育改善実施状況調査結果概要（高等学校）”(2006).
7) 文部科学省：“平成２６年度英語力調査（高校３年生）結果の概要”(2014).
8) 文部科学省：“平成２９年度英語力調査結果（高校３年生）の概要”(2017).
9) 文部科学省：“平成２９年度英語力調査結果（中学３年生）の概要”(2017).
10) 文部科学省：“平成３０年度　高等学校等における英語教育実施状況調査【集計結果】”(2019).
11) 西澤一、吉岡貴芳、伊藤和晃：“工学系学生の苦手意識を克服し自立学習へ導く英語多読授業”、工学教育、第58-3、12-17項 (2010).
12) 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同研究：“子どもの生活と学びに関する親子調査 2016”(2016).
13) 投野由紀夫：“言語材料とのリンクが広げる CAN-DO の可能性”、『英語教育』１月号、28-29 頁(2017).

別紙：CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）

（別紙）

外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠について

・CEFRは、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、包括的な基盤を提供するものとして、2001年に欧州評議会（Council of Europe）が発表した。現在、欧州域内外で使われている。

・欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施する際に用いられたりしている。

熟練した言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含蓄を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるため、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

（出典） ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1780-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検：日本英語検定協会 http://www.eiken.or.jp/teachers/data/cefr/
http://www.eiken.or.jp/press-release/info/2014/pdf/0901/20140901_pressrelease_01.pdf
TOEFL：米国ETS Washington州立研究開発中心
IELTS：アドバンス・カウンシル（ALC）日本事務局英語検定協会 資料より
TEAP：慶応義塾大学教育センター（ALC）日本事務局英語検定協会 資料より
Cambridge English ケンブリッジ大学英語検定機構 http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/
http://www.cambridgeenglish.org/courses/cambridge-english-scale/

GTEC ：ベネッセコーポレーションによる資料より
TOEIC ：IIBC http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html
TOEFL/IELTS/TEAP/TOEIC/英検/準1・準級データ 各関係団体より

※各団体の公表資料より文部科学省において作成

13